# 小学校における自由遊びの考え方と指導について

橘　清子

遊びは、児童の生活の中でも大きな場を占めている。そして成人の社会における活動、仕事、職務と同様に重要な意義を持っている。授業から解放された子どもたちは、例外なく肩のこりをほぐし、次に来る遊びへの期待から、一種の興奮状態におちいる。そして子どもたちは夢中になって遊び出す。何かの遊びにひどく熱中している子どもは、ある時間ほかの事を忘れ、その時におこっている他の現象には、全然気がつかないこともある。このように、子どもたちは、全く遊びに没入することができる。

遊びにおいて、重要な地位を占めるものは空想や想像である。しかし子どもたちは、空想や想像によって、非現実的な嘘の世界に浸っているのではなく、それらを通して、環境で起こることを、遊びに反映させて、環境の現象や周囲の人々の行動や、対人関係を、より深く理解しているのである。

子どもは、一つの遊びを成し遂げる満足感から、仕事への意欲を感じ始めてくる。始めは目的のなかった遊びが次第に目的を持った仕事へと移行してくる。であるから、遊びにおいて見受けられた児童のさまざまな態度は、仕事においても同じように表われてくる。例えば、自分勝手で、多くの友たちと遊べなかった子どもは、仕事をしていても、他人と協調できず、絶えず不満状態にあって、仕事の能率は、上らないだろうと思われる。その反対に、いつも多くの友だちと仲良く遊び、その事に熱中出来た子どもは、仕事をしても、対人関係が円滑に流れ、きっと立派な仕事を成し遂げることができるだろう。このように、遊びに対する児童の態度は、多くの点で大きくなって仕事をする時の態度でもある、と言える。だから、我々は遊びの中で、児童が未来の働き手として、また立派な社会人として、その素質が教育されるように、遊びを指導していかなければならないと思う。

小学校低学年（一、二年）では、友人関係は、あまり密接ではない。いつも先生の傍にいたがり、友人同志だけでの遊びは長つづきしない。この時期では、もっぱら構成されたものを動かして、一つの遊びの素材として活用しており、幼稚園時代と、あまりはっきりした区別は見出されないようである。しかし、二年生の三学期頃から、だんだんと友人関係は密接になってくる。

中学年（三、四年）では、低学年の時にくらべて、はっきりした

遊びの活動における新傾向が、みられるようになる。子どもは、協調的になり、組織されたグループの一員として遊ぶ。そして、一、二の者が、グループ活動を指揮し、いわゆるギャング時代になってくる。

それでは、良い遊びとは、どのような遊びのことを言うのだろうか？　それは、遊びの中に喜びがあり、（例えば、美しいものを見る喜び、欲求がみたされた時の満足感など）仕事の努力と、思考の努力、積極的な活動が、みられるようなものであると思う。

遊びに対する一般的な親の態度は、だいたい

①放任型（子どもの遊びに対して全く無関心な型）　②干渉型（うるさい位に口出しをする型）　③豊富型（おもちゃさえ与えれば良いとばかりに、子どものいうままに、おもちゃを与える型）などがあげられるが、このいずれでも子どもの遊びを上手に指導することはできない。

小学校における遊びの指導においても、同じことが言えるわけだが我々は自由放任と言うのではなく、遊びの選択の可能性を豊富に用意して、遊びを通して、単なる見物、単なる満足よりも、もっと完全な充足感をめざす意気を育て上げ、苦難を雄々しく克服することを教育し、想像力と、巾広い構想力を育てあげていくことが大切である。すなわち仕事をするのに必要な心理的および肉体的習慣を遊びの中において育てあげていくように努力していかなければならないと思う。

私の学校では、教師の一日の仕事はまず子どもたちが登校してくるその時から始まる。朝の子どもの状態をはっきりつかむためだ。授業は、前半・後半・午後の三部に分かれ、子どもたちが自由遊びに熱中するのは、前半と後半の間にある二〇分の休みと給食後の休み時間、それから週に一回ずつまわってくる放課後の運動場使用日（三年生以上）である。それらの時間、担任はいつも子どもたちと行動を共にする。前半と後半の間にあるまとまった二〇分間の休みは、体力がみちあふれている子どもたちにとっては、全く楽しい時間なのである。教師は彼らの友たちのひとりとなって彼らと通じ合い理解を深めていく。こうして伸びのびと二〇分の休みをすごした彼らが後半の授業をうける時には、教師は厳然とした態度で彼らをリードしていかねばならない。正規の授業ではもちろん遊びの要素は含まれるが、それはクラス全体で統一のとれた一つの遊びなのであって、休み時間に彼らが楽しんだ自由遊びとは、おのずから異なったある程度強いられた遊びになってくる。ここで大切なことは、強いられた遊びではあっても、必らず子どもの興味にあったものでなければならないことである。例えば、三年生の子どもに、かけ算九々をしっかり覚えさせようという目標を持った授業では、まず子どもたちに方法を考えさせる。彼らは、さまざまな方法を巧みに見つけ出す。「学校ごっこがいい」と言えば、先生をひとり決め、その先生役が2×2＝4というとみんなが2×3＝6と応答する。「グループごとの競争がいい」といえば「8のだん用意はじめ」で各グループごとにひとりが一つずつ8のだんの九々を書いて次の子にまわし、早くできた方を勝とする。

このように授業中における遊びには、必らず目標を持って子どもの興味に合うものを全体の中で統一させていかなければならないと思う。

（東京・駒本小学校）